

求められる「寄り添った」支援

昨夏、休刊の危機にあった、不登校・引きこもりの専門紙「Fonte」（フォンテ）の部数が倍増した。昨年4月は約800部だったが、今年8月で約1600部に。不登校や引きこもりの体験談を掲載するなど当事者の立場に立った数少ないメディアとして注目を集めている。

（油原聡子）



石井志昂
編集長

共感の機会に

同紙は平成10年5月、創刊。不登校や引きこもりの子供や親の体験談を掲載するなど当事者に寄り添った紙面作りを行ってきた。創刊当時は約6千部の発行だったが、昨年4月には約800部まで減少し、休刊の危機に直面した。

しかし、国内に数少ない、引きこもりや不登校の専門メディア。昨夏、大津

不登校専門紙が部数倍増

のいじめ自殺事件が報道されたことを一つのきっかけに再び注目を集め、部数が増加した。同紙の石井志昂編集長は「当事者の声のニーズの高さを実感した。子供も親も不登校や引きこもりの苦しさに関感してもらえる機会が少ないのではないか」と振り返る。

脱しきれない

一時期、部数は低迷したが、ホームページの訪問者は増加傾向にあった。昨年1年間は約15万人だったが、今年は8月末で既に約24万人。インターネット上で情報を求める人が多いこ



不登校新聞

インターネットでは不登校新聞が始まった
（全国不登校新聞社提供）

とから、8月下旬からは有料のウェブサイト「不登校新聞」もスタートさせた。同紙の過去2年半分の記事から子供や若者の記事150本超、親や祖父母の記事約50本がそれぞれ掲載されている。今後はウェブでのオリジナル記事も掲載していく予定だという。

ウェブ版で人気を集めているのが、不登校のその後を扱った記事だ。不登校を経験後、支援する側に回った30歳の男性の話は反響が大きかった。

不登校の男性が16歳の頃、不安と焦りからアルバ

イトを探したが見つからず、父親に「18歳まで猶予をください」と訴えた。すると、父親が「18歳だとか猶予だとかにこだわらなくていい」「俺の子供である以上、この家に住むために何かをする必要はない」と答えたエピソードが掲載された。これを見た子供側からは「救われた」、親側からは「子供はこう言っただけじゃなかったのか」という声が寄せられた。

不登校経験者の女性が25歳になった今も引きこもりがちという記事もよく読まれている。不登校を脱した記事だけではなく、苦しみ悩むありのままの姿をつづった記事が人気を集めていることに、石井編集長は

生きた情報が心のよりどころに

教育評論家、尾木直樹さんの話「不登校や引きこもりの子供や親は『自分たちの悩みを分かってくれ』という思いがあり、生きた情報を求めている。しかし、当事者に寄り添った情報はなかなかない。Fonteで当事者や経験者の記事を読むことで『不登校だからって人生が終わるわけではない』という頑張りや安心感につながるのではないかと。部数が伸びたのは大津のいじめ自殺事件の報道で注目されたただではなく、当事者の人々にとって生きた情報が心のよりどころになっていったということだろう」

Fonte

NPO法人「全国不登校新聞社」（東京都北区）が平成10年5月に創刊。東京、大阪、名古屋に編集拠点があり、月2回、不登校や引きこもりの当事者や保護者の体験談を中心に、子供に関する事件や裁判、文部科学省の動きなど教育に関する話題を掲載している。購読料は1カ月800円、6カ月4800円、12カ月9600円。ウェブ版の「不登校新聞」は1カ月800円。申し込み・問い合わせは、Fonte東京編集局 ☎03・5963・5526。

「不登校から脱しきれず、同じような状況の人が多くからではないか」と指摘。不登校でついた傷や、そのときの親子関係の問題を時間がかかっても引きずっている人は多いという。

石井編集長は「当事者は不登校や引きこもりになった後のコミュニケーションがなくて、孤立してつらい思いをしている。逃げた先のつながりをつくり、支援につながられたら」と話している。